研究ノート

長沢鼎のワイナリーの発展と帰国と家族の誕生

森　　孝晴

1．全米の10大ワイナリーの一つとなったファウンテングローブ・ワイナリー

1893年にサンタローザから出荷されるワインの９割がたがファウンテングローブ・ワイナリーの製品であったが，もともと1880年にはサンタローザで生産されるワインの量がカリフォルニアで生産されるワインの約9.1パーセントを占めていたことを考えると，実に，ファウンテングローブ・ワイナリーのワインはカリフォルニアで生産されていたワインの約8.2パーセントだった計算になる。このことは，いかに長沢が管理するワイナリーが大きく，高い生産力を誇っていたかを物語る。

「ファウンテングローブ」銘柄のワインを独占販売していたレイ・クラーク社（社員はすべて新生兄弟社のメンバー）の主力商品は赤ワインの「クラレット」であった。赤紫色の辛口ワインで，ボルドー系のブドウから作られ，同社が販売するワインの75パーセント占めていた。ファウンテングローブの名で他に作られたワインには，「カベルネ」「バーガンディー」といった赤ワインや，「ゴールデン・チャセラス」「フラワー・オブ・ファウンテングローブ」といった白ワイン（辛口），「マラガ」「トーケイ」「ポート」といった甘口ワイン（食後用）があり，ブランデーとしては，「ブラックベリー」「コニャック・グレープ」などもあった。

白ワインは当時のアメリカではあまり好まれなかったようだ。また，長沢はシャンペンにも挑戦したが，結局市場に出されることはなかった。そんな中で1892年にハリスがニューヨークに去り，ジョナサン・レイもニューヨークにいて，（ハリスと不仲になっていた）レイ・クラークが1900年の１月頃にハリスによって兄弟社を追放されると，ファウンテングローブ・ビンヤード・カンパニーと名を変えたワイナリーの経営の全責任は長沢が負うことになった。研究者であり企業家でもある長沢の誕生である。

このころから長沢はナパやソノマのほかのワイナリーを意識するようになり，自分のワインをコンテストに出品するようになる。1893年には，サンフランシスコ冬季フェアにおいて行われたカリフォルニア州ワイン・コンテストにおいて，832件という多くのカリフォルニアのワイナリーと戦って，堂々２位に輝いた。出品したのは，カベルネ・ソービニョン種の赤ワインであった。またのちに述べるが，2016年になって発見された長沢のブドウの木はカベルネ・ソービニョン種であった。

また，時をさかのぼるが，1887年に長沢は，カリフォルニア大学の農業試験場の委託を受けて，ワインの改良事業に協力している。上記の受賞と併せて考えると，いよいよもって彼の研究者としての面目躍如たる時代の到来であった。長沢は，ワインの製造技術や新しい農業技術の研究のため長時間かけて実験や読書に傾倒していた。1895年には，牛や馬の育種実験も行った。この時協力したのが甥（長姉トキの二男）の本田幸介であった。本田は出世を果たし朝鮮の成観農場の場長となっており種畜に関心があった。長沢は，朝鮮の農場で本田が飼育していた馬の品種改良に役立て

キーワード：長沢鼎，ワイナリー，帰国，家族

ようと，彼がサンタローザに訪ねてきたときに自分が育種した特別で優秀な品種の牛や馬を多数譲り渡した。

本田幸介

1897年ごろ長沢は生糸の製造にも挑戦したが，こうした彼の勤勉さはハリスの考え方の影響とまじめな性格によると思われるが，前述したように，結婚する暇もなく労働することが彼の性に合っていたのだろう。そして畑の状態を保つこまごました労働の中で，接ぎ木の作業を行い常に虫眼鏡を携行してその接点を調べていたという。ブドウ栽培に並々ならぬ執念を燃やしていたことがわかる。

ファウンテングローブ・ワイナリーはカリフォルニア州の（つまり全米の）10大ワイナリーの一つになっていた。1889年段階で400エーカーのブドウ畑があり，州内でも最大級であった。

2．甥の伊地知共喜の加入と第１回目の帰国

長沢は依然として事実上一人で暮らしていたが，1896年にようやく家族ができることとなった。姉（長沢の父孫四郎の次女）モリの長男伊地知共喜が手紙をよこし長沢に協力したいと申し出て，いよいよファウンテングローブにやってきたのだった。共喜はその後カリフォルニアに永住することになり，ワイナリーのブランデー製造の責任者にもなった。

この年には長沢の両親はすでにこの世にはいなかったが，多数の親戚が鹿児島にいた。今も筆者は鹿児島市の数家族，そして東京の１家族と連絡が取れるし，カリフォルニアのナパにも赤星家の子孫が住んでいる。長沢の末弟の弥之助は赤星家の養子となり赤星弥之助となっていたが，彼の長男鉄馬は裕福な実業家として朝鮮で大きな牧場を経営していた。鉄馬には多数の兄弟姉妹がおり

(10人を超える)，長沢の姉モリが1888年に新たに入籍した佐々木家の人々やもちろん磯長本家の人々，つまり孫四郎の長男吉輔に連なる人々もいた。

長沢の長姉トキは野村家に入籍しているが，トキの二男が既出の本田幸介である。トキやモリと長沢の関係は良好だったようで，彼の帰国時にも一緒に写った親しげな写真が今も残っている。野村家の子孫の家（野崎家）には，長沢のサイン入りの写真カードや彼の祖父の書簡も残っているくらいである。

さて，長沢は共喜と長い話し合いをした後，実に32年ぶりの帰国を果たすことになった。1897年の７月，彼は共喜を伴ってサンフランシスコを出国した。長沢45歳の時であった。二人が横浜港に着くと，「ブドウ王」が帰国したと言って，親戚たちが大騒ぎをして彼らを出迎えたが，長沢が日本語（鹿児島弁）をしゃべったことに驚いた。港で最初に長沢を迎えたのは実の末弟で赤星家の養子となっていた赤星弥之助だった。長沢はすぐに彼がわかったようで，「わや弥之助か」と言ったそうである。薩摩藩士であることを忘れたことのない彼が日本語（鹿児島弁）を忘れるはずがないのである。なお，10月４日には鹿児島の万勝亭において歓迎会があった。

1897年の第１回目の帰国時の写真（牛込加賀町にて。上段真ん中に長沢〔45歳〕。上段左から三人目が本田幸介）

ところで，長沢は生前合計４回の帰国を果たしているが，興味深いのは４回とも彼は重要な「仕事」の目的を持って帰国している。ただ里帰りをするためだけに帰国するような暇な男ではなかったのである。また，それまで薩摩のため役に立てていない自分がそんな浮かれた気分で帰国できるとも思っていなかっただろう。１回目の帰国の目的は，実現はしなかったものの，すでに触れたメキシコへの日本人移民の移住計画のためである。国へ働きかけようとしたのかもしれない。10月７日付の鹿児島新聞には，取材を受けた時に「25万人移住の計画」について詳細な説明をしたことが掲載され，彼は計画実現へ旺盛な意欲を見せていた。長沢が妻帯するために帰国したと思った人も

多かったが，前述したように，忙しくてそんな暇はないと断ったわけで，門田に言わせると「ある重要な経済的配慮が働いて」帰国したのであった。

こうして長沢の1897年後半の第１回帰国が終わり横浜港から帰米したが，この時期の前後に興味深い事件が二つ起きている。一つは新井の帰国である。彼は1899年８月１日に帰国しており，長沢とは対照的に，ハリスの強い影響を受けたキリスト者として生涯を布教にささげた。彼は足尾鉱毒事件にかかわって田中正造と行動を共にしたし，これもハリスの影響であろうか，一生独身であった。また，明治の末というから1900年代に入ってから，つまり長沢が50歳に達したころだろうか，彼の武士道精神が全く失われていないことが証明されるエピソードが生まれた。

『郷土人系』によると，そのころ日本海軍の練習艦隊がサンフランシスコ港に寄港したことがあった。この時たまたま旧藩主島津家の当主島津忠重が士官候補生として乗り組んでいたのである。長沢はそれを耳にするとたまらず馬車で迎えに行き，ワイナリーに招いて家の門前で土下座して周囲の人々を驚かせたというのである。同書には「旧藩主への忘恩をわびたい・・・という思いはただ，その一念であった」とある。すでに藩主ではない忠重も明治維新を直接経験していない長沢にとってはいまだ忠義を尽くすべき「主君」であった。

３．長沢らへのファウンテングローブの譲渡と彼の立ち位置

長沢はサンタローザに戻って何もなかったかのように仕事を再開したが，このころ親しく関係していたアメリカ人が三人いた。それは，長沢の顧問弁護士のウォレス・ウェアとウォレス・ウェア・ジュニアであり，長沢の代理人・財政顧問として重要な役割をしていたジョージ・Ｆ・キングだった。キングはサンタローザのグローサリーストア（日本のスーパーマーケット）の経営者だった。

ハリスもすでに77歳の高齢となり，1900年を迎えると１月にレイ・クラークを追放した後，主な数人のメンバーを選択して自分の築いた業績を継承することを決心した。ハリス夫人のアドバイスもあり，ファウンテングローブ農場とワイナリー（醸造会社）が長沢を含むサンタローザの３人の新生兄弟社メンバーとニューヨークの２人のメンバーに譲渡されたのだ。そのメンバーとは，サンタローザ側は長沢とユーザルディア・ニコラス嬢とマーガレット・イーディス・パーティング嬢，ニューヨーク側はロバート・ハートとメアリー・ハートであった。

この時の値段は４万ドルという安値だったが，ハリスの気持ちは遺産相続のようなものだったのだろう。48歳になっていた長沢はこのことの結果，経営の全責任を負うことになり，企業家として本格的に活躍することになる。彼は円熟し，洗練され，精力的であったし，自信を持ち孤高な印象を与えた。高い教育機関に学んだわけではないが，多分に知的で貴族を思わせるような品格があった。

ハリス夫妻（1900年ころ）［真ん中がハリス，
その左が夫人（ダビーおばさんことJ・L・ウェアリング）］

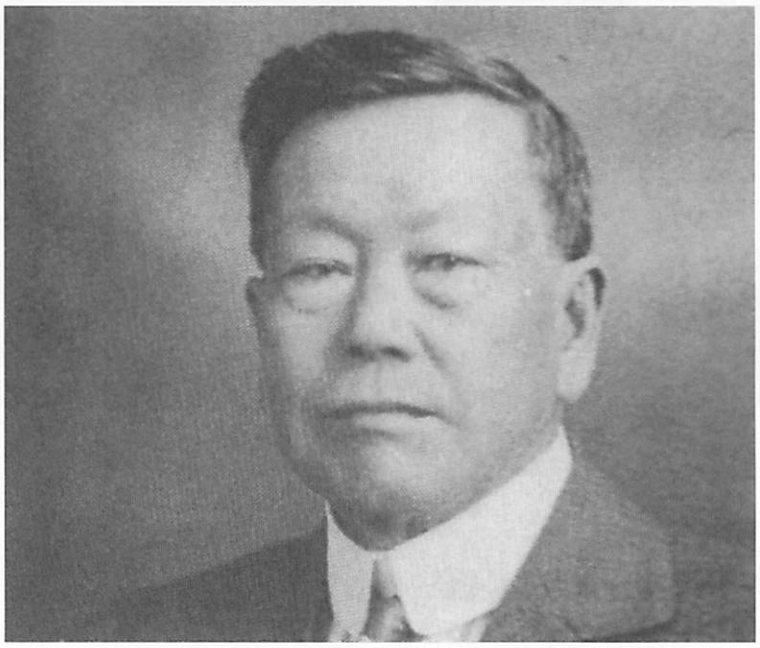
長沢は伊地知共喜という家族を得て大いに力をもらい自信も深めたが，後に述べる二回目の帰国も彼に力を与え，自信を与えた。彼はこのころから外へと行動範囲を広げるようになり，ソノマ郡，ナパ郡にあるワイナリーのほとんどを訪問したし，旅行にも出かけるようになった。長沢は1909年に壊れるまでフランクリン型の乗用車に乗っていて，その後は1911年にビューイックを買い求め，最後までこれに乗っていたという。ワイン製造については，カリフォルニア州の各地のワイナリーを視察して回ったが，特にナパとアスティー地方でいろいろなことを学んだ。また，「ジャガイモ王」として知られたジョージ・シマ（牛島謹爾）とも親交があり，もう一人の農業経営における日本人成功者であるシマは，カリフォルニア州セントラル・バレーの自宅にたびたび長沢を迎え入れた。

そもそも長沢は，筆者の調べた限りにおいて日本人として初のアメリカ移民である。ジョセフ彦やジョン万次郎など彼より早くアメリカに渡った日本人がいることは間違いないが，移民というのは移住しそこで仕事をもって生活し永住するかそれに近い長期間住み続けることだとしたら，長沢以前に彼より長くアメリカに住み続け永住した人間は（少なくとも記録上は）他にはいないだろう。

ジョン万次郎，本名中浜万次郎は，確かに長沢より10年以上早く1843年にアメリカに着いているが，ニューイングランドの学校で学んだあと長沢の生まれる１年前の1851年に帰国している。彼はアメリカに８年ほどしか住んでおらず，その後の日本での影響力については注目すべきではあるものの，アメリカ移民とは程遠い。

さて，長沢の当時におけるアメリカやカリフォルニアにおける位置関係はどうなっていただろう。長沢がニューヨークに着いた1867年ころには，アメリカにいた日本人の総数は30人以下だったと思われる。しかし，1890年から1915年の間が日本人移民の激増期だったので，1890年には千人強であったカリフォルニアの日本人人口は1900年にはその10倍くらいになっていた。そして，1910年

に全米で68000人ほどの日本人がいたが，そのうち4万人強，つまり6割以上がカリフォルニア在住だった。つまりカリフォルニアの日本人の状況がほぼ当時の在米日本人の状況であったと言っても過言ではないのである。そのカリフォルニアで最も有名な日本人は長沢とジョージ・シマであったので，彼らはアメリカでもっとも有名だったとも言えよう。



50歳ころの長沢

1900年代の後期には日本人移民の農業労働者のうち15パーセントほどが独立した農地所有者になっていた。1920年になると全米の日本人の85パーセントがカリフォルニア在住となり，同州の日本人移民は増加を続けた。1919年の数字では，カリフォルニア州の農地のうち12.5パーセントが日本人に所有されていたそうである。また，1916年ころに日本人によって生産されたブドウはカリフォルニアで生産されたブドウの35パーセントに及んでいたそうだ。

ファウンテングローブはこうしたブドウ生産者の先頭に立っていたが，これを主導していたのは長沢である。そのことはよく知られていたし，彼は日本人移民たちの先頭にも立っていた。長沢がカリフォルニアのブドウやワインの生産において，そして日本人移民運動の歴史においても高い功績があることは，1983年11月のレーガン大統領（当時）の演説を聞くまでもなく，確かなことである。

4．ハリスの死とブドーノコブ病の発生

1892年にハリスはニューヨークに去っていて，ファウンテングローブの経営は，ニューヨークにいるロバート・ハートとメアリー・ハート，サンタローザにいるユーザルディア・ニコラスとマーガレット・イーディス・パーティングと長沢の5人が行っていた。しかし，ニコラス嬢は1903年に死亡し，パーティング嬢は農園の仕事にはほとんど関心がない人だった。すでに触れたが，1893年

にジョナサン・レイが死亡して以来ロバート・ハートはニューヨーク事務所の運営に集中していたので，結局長沢一人がファウンテングローブの真の指導者であった。そのことはカリフォルニア州でも誰もが認めることであった。

1902年に甥（姉モリと佐々木権之介の息子，共喜の義理の弟）佐々木英吉がファウンテングローブに加わり長沢の家族がまた一人増えた。ところで，1904年にハリスの体の衰弱がひどくなると，長沢は彼にぜひ会っておきたいというハリスの要請にこたえて，死期が迫って静養中だったハリスを訪ねてフロリダに会いに出かけて行った。そこでハリスは，13万ドルに上る新生兄弟社の基金について彼の死後はハリス夫人（ダビーおばさんことジェーン・L・ウェアリング改めジェーン・L・ハリス）に託され，彼女の死後は長沢に任されると遺言し，夫人もこれに賛成した。

この２年後の1906年にニューヨーク州でハリスが亡くなった。それに伴いハリス夫人とハートの家族はサンタローザに移住してきた。ニューヨークの事務所の運営はジェームズ・フリーマンが行った。しかし３年ほどたつと新生兄弟社の主要なメンバーの間がぎくしゃくするようになってきた。長沢がファウンテングローブ・ワイナリーの実権を握り，すでにハリス夫人やハートが経営にかかわる余地がなかったため，長沢と対立した彼らはサンディエゴに移転した。

こうした災難が起こる少し前，ハリスが亡くなるころに，カリフォルニアでブドーノコブ病が発生し，ファウンテングローブのブドウ園にも侵入したのだ。1873年にカリフォルニアで初めて見つかったこの病気の原虫は，1906年にサンタローザでも確認された。1878年に長沢が初めてこの地にブドウの植え付けを行ったときにはこの病気の脅威を彼はあまり大きく考えていなかったが，1908年には長沢のブドウ園も全面的に被害を受けることになった。

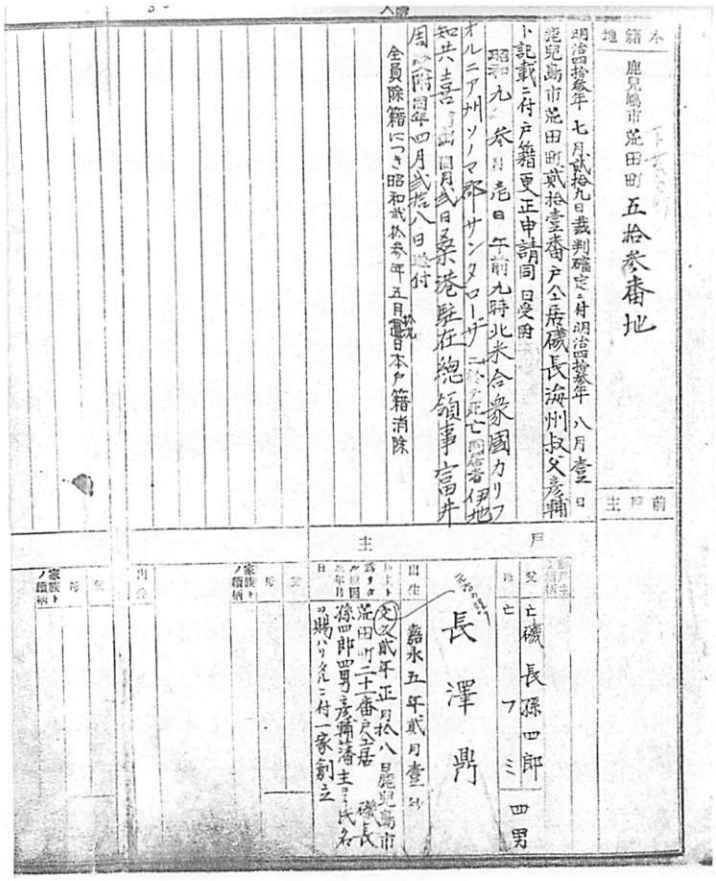
新種のブドウの苗が速やかに植えられることになった。ブドーノコブ病に強い苗が集められたが，これらが成木になるまでには３年が必要だったので，しばらくはブドウ自体を他の農家から買い取ってワイン造りを続けた。これは高くついたが，1909年の納屋の消失（1911年に再建）や1910年の管理棟の消失といった災難も乗り越えて，1911年には400エーカーに及ぶブドウ畑を再び手にしていた。この年，マーガレット・イーディス・パーティングがファウンテングローブで死去した。このことは，長沢がファウンテングローブ・ワイナリーの唯一の所有者になったことを示していた。

５．新戸籍の創設と第２回目の帰国

このころに長沢は自分のルーツや親族をめぐる２つの注目すべき行動をしている。一つは，日本に新しい戸籍を作ったことだ。実はこの時期日本人はアメリカ国籍を取れなかったようだ。一方で長沢の日本の戸籍は抹消されていた可能性が高い。長い年月に渡って日本にいなかったし，1865年に出国した後は幕府の目を気にして戸籍から外した可能性も高い。したがって彼は無国籍者になっていたと思われる。ただし，長沢にはアメリカの国籍を取るつもりなどつゆほどもなかったろうし，自分はあくまでも日本人であり薩摩藩士であると思っていたことはまず間違いない。

長沢は1910年（明治43年）８月１日付で，鹿児島市荒田町（今の下荒田町）53番地に新戸籍を作った。すでに論じたことだが，長沢は上之園町の生まれといわれているが，隣接する下荒田町にも磯長家や母親の家系の親族の土地などがあったようで，この地への思い入れがあったと思われる。いずれにせよ，自分が日本人であり薩摩藩士である証として新戸籍を作ったことは明らかで，長沢が

故国や故郷を捨てたわけではないことがわかる。

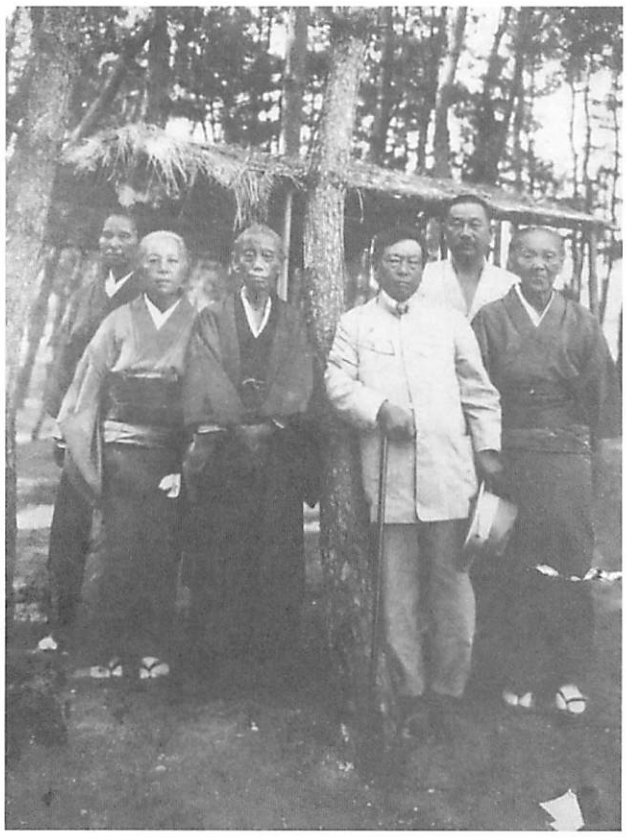

本籍地　鹿児島市荒田町五拾参番地
明治拾参年七月貳拾九日裁判確定ニ付明治拾参年八月壹日
鹿児島市荒田町貳拾壹番戸ニ於磯長海州叔父彦輔
ト記載ニ付戸籍更正申請同日受附
昭和九年拾月壱日午前九時北米合衆國カリフ
オルニア州ソノマ郡サンタローザニ於テ亡
知共壱通同月弐日桑港駐在總領事宮井
周次附同年四月弐拾八日送付
全員除籍につき昭和弐拾参年五月壱日本戸籍消除
長澤鼎
嘉永五年弐月壹日
父武平正月拾八日鹿児島市荒田町二十番戸ニ居磯長孫四郎男ニ彦輔満主ニ氏名ノ賜ハリ名ニ付一家創立
磯長孫四郎
フミ
四男

長沢鼎の新戸籍

この新戸籍にはさらに興味深いことがある。この新戸籍の自分の名前の欄が「長沢鼎」となっていることである。彼の本名は長沢鼎ではなく「磯長彦輔」である。事実その横には父の名「磯長孫四郎」と母の名「フミ」が記載されているのである。現代の感覚からすればはなはだおかしなことが行われていることになるが，筆者は，どうしてもそういう形にしてほしいと長沢がごねたのではないかと想像している。

このことは，市役所がその要求に折れたことを物語るとともに，長沢が藩主からもらった名前（変名）にいかにこだわったかがわかる大きな証拠だと思われる。

さて，もう一つの行動は第２回目の帰国である。長沢は1913年（大正２年）の夏に再び帰国している。61歳の時である。８月３日のお昼前に鹿児島に着いている。この帰国の目的は満州・朝鮮の果樹園の視察であった。それは甥の本田幸介が朝鮮にいたからであり，渡辺正清によれば，長沢が朝鮮の本田のところに種馬を送ったりしていたので，この機会に本田が関わっている牧場を訪れたということである。



第２回目の帰国時の写真（場所は鹿児島市の二軒茶屋）
右からコマ（三番目の姉），磯長鉄之助（長兄吉輔の二男），長沢（61歳），モリ（二番目の姉で共喜の母），アヤ（吉輔の長女）

同じ時に同じ場所で親族と撮った写真（後段真ん中に長沢。姉たちも写っている）

長沢は日本滞在中にアメリカ移住を計画していた人々から様々な要請を受けた。またこの帰国時には弟の赤星弥之助から将軍家伝来と伝わる刀を贈られた。後年来客があると，たびたびこの刀を引き抜いてそれを振り回して見せたそうだ。これは自顕流の「抜き」と「続け打ち」であったろう。将軍家伝来かどうかは別として，この刀が2017年10月に全焼したパラダイスリッジ・ワイナリーの長沢展示室にあった刀だったのだろうか。この刀は2018年３月になって奇跡的に廃墟の中から発見されたが，長沢と同居していた甥の伊地知共喜の孫にあたる当主のケン・イジチ氏によると，確かにそれは長沢の刀だそうだ。しかし彼は他にも刀を持っていたそうで，大事にしていておそらく人に見せていたと思われる刀は別にあるそうである。筆者は，複数の刀を長沢が所有していたことに驚いた。まさに刀は武士である長沢の「命」だったわけだ。

新聞記者の前でこの刀を抜いて見せたこともあったそうである。ディアボーン・インディペンデントという新聞の記者の見ている前で長沢がさやから刀を抜く動作や身のこなしはいかにも武士を思わせるものだった。敵を前にしているかのように鬼気迫る様子で力強くかつ素早く抜き放つのを前にして，記者は他の人ならより慎重に刀を抜いたのではないかと感じたようだ。それは長沢にとって当たり前のことで，自顕流で最も大事なのはスピードとパワーであり，その〈意地〉は「二の太刀は負け」「一刀必殺」だからである。

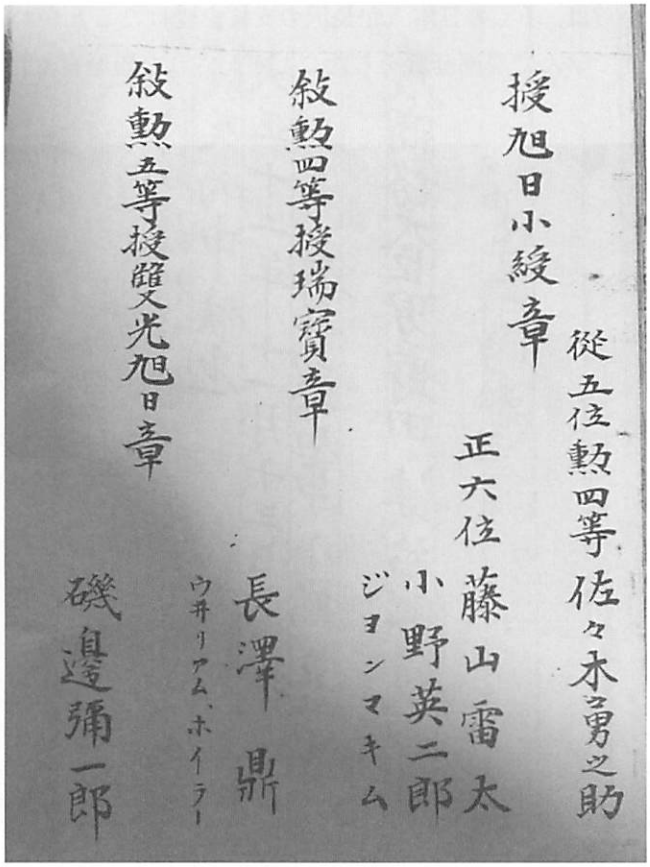
これらのエピソードが語るもの，証明することは説明するまでもない。

６．高い評価を受ける長沢

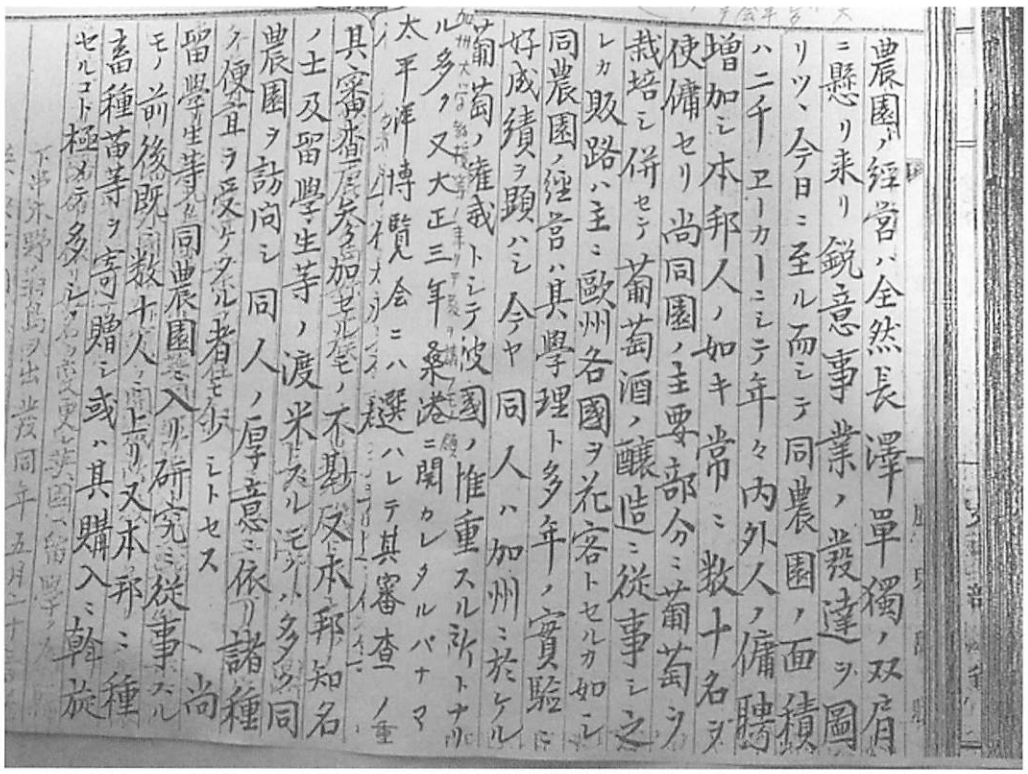
長沢は，各方面から高い評価を受けるようになっていた。例えば，ジョージ・シマや吉田日銀サクラメント支店長といっしょに日本人農業協会の顧問委員会のメンバーとなっていた。彼はカリフォルニア州最高の農業経営者として認められ，ブドウ栽培において指導的な役割を果たしたということでその功績が認められつつあったのだ。

1915年２月には，その前年のパナマ運河開通を記念するパナマ・パシフィック万国博覧会が開催され，日本の代表委員は長沢の名を万博のための専門家のリストに掲載した。アメリカ在住にもかかわらず，である。各関係国に対して大学や企業などの専門家を派遣するようにとの要請があったのに日本が応えたものであるが，長沢は賞をめざして出品される品物の審査を依頼されたのだ。農業をはじめ芸術や科学や教育や工業など500人のその道の最先端の専門家に混じってのことであった。彼が選抜された理由は，まずはその豊富なブドウ栽培の知識であったし，次いで彼がアメリカで勝ち得た誠実な人柄への信頼と実績への評価だった。なお，この折に長沢はバーバンクの引き合わせで発明王エジソンや自動車王フォードと出会い，知り合いになっている。

この万博での功績を評価されて，1924年（大正13年）２月11日に長沢は日本の本国から勲五等雙（そう）光旭日章を授与されている。71歳になる直前のことだった。さらに1928年（昭和３年）にも大礼記念章を受けている。母国日本から与えられたこの二つの勲章は，薩摩や国のために働きたいと考えていた彼には何物にも代えがたい大きな名誉であっただろう。

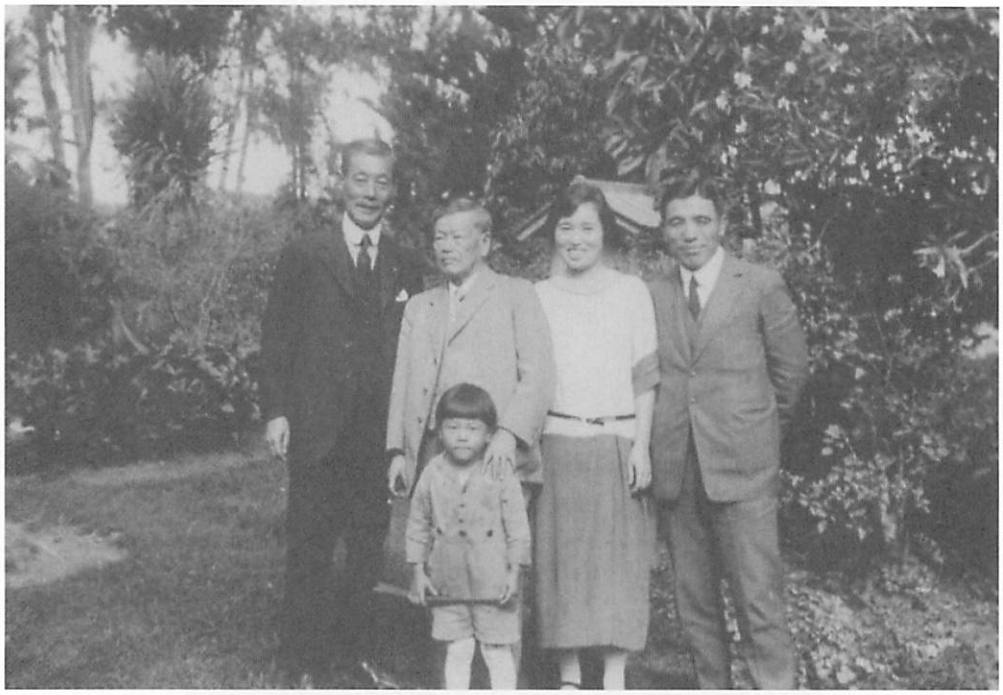

授旭日小綬章　從五位勲四等　佐々木勇之助
正六位　藤山雷太
小野英二郎
ジョンマキム
叙勲四等授瑞寶章
長澤鼎
ウヰリアム、ホイラー
叙勲五等授瑞寶又光旭日章
磯邊彌一郎

長沢の叙勲資料１（訓令の部分）


農園ノ經營ハ全然長澤單獨ノ双肩ニ懸リ来リ鋭意事業ノ發達ヲ圖リツヽ今日ニ至ル而シテ同農園ノ面積ハ二千エーカーニシテ年々内外人ノ傭聘増加シ本邦人ノ如キ常ニ數十名ヲ使傭セリ尚同園ノ主要部分ニ葡萄ヲ栽培シ併セテ葡萄酒ノ釀造ニ從事シ之レカ販路ハ主ニ歐州各國ヲ花客トセルカ如シ同農園ノ經營ハ其學理ト多年ノ實驗ト好成績ヲ顕ハシ今ヤ同人ハ加州ニ於ケル葡萄ノ權威トシテ波國ノ惟重スル所トナリ多クハ又大正三年桑港ニ開カレタルパナマ太平洋博覧会ニハ選ハレテ其審査ノ重ノ其審査員ヲ加セルモノ不勤及本邦知名農園ヲ訪問シ同人ノ厚意ニ依リ諸種ノ土及留學生等ノ渡米トスルモノハ多クハ同ノ便宜ヲ受ケタル者モ少ニトセス　尚留學生等ハ同農園ニ入リ研究ニ從事スルモノ前後既ニ數十人ノ間上リ又本邦ニ種畜種苗等ヲ寄贈シ或ハ其購入ニ斡旋セルコト極メテ多シ

長沢の叙勲資料２（鹿児島県知事が提出した事績調書，「葡萄ノ権威」や「パナマ太平洋博覧会」の文字が見える）

この書類の記述の中からは，多くの日本人が長沢の支援を受けたことがわかる部分もある。また，留学の経緯やハリスの下で学んで農園経営をしたことが記された履歴書も付属している。



70歳くらいの長沢。共喜の妻ヒロやその長男幸介とともに

文献

犬塚孝明（1974，1981）.『薩摩藩英国留学生』東京：中公新書.
_____（1986）.「翻刻　杉浦弘蔵ノート」『鹿児島県立短期大学地域研究所研究年報第15号』鹿児島：鹿児島県立短期大学.
_____（1987）.『明治維新対外関係史研究』東京：吉川弘文館.
_____（2001）.『密航留学生たちの明治維新　井上馨と幕末藩士』東京：日本放送出版協会.
_____（2007）.「1866　慶応二年　薩摩藩英国留学生」『世界を見た幕末維新の英傑たち　咸臨丸から岩倉使節団まで』東京：新人物往来社.
門田明（1991）.『若き薩摩の群像』鹿児島：高城書房.
門田明，テリー・ジョーンズ（1983）.『カリフォルニアの士魂――薩摩留学生・長沢鼎小伝』東京：本邦書籍.
上坂昇（2017）.『カリフォルニアのワイン王　薩摩藩士・長沢鼎―宗教コロニーに一流ワイナリーを築いた男』東京：明石書店.
熊田忠雄（2016）.『明治を作った密航者たち』東京：祥伝社.
森孝晴（2014）.『ジャック・ロンドンと鹿児島』鹿児島：高城書房.
森孝晴，三木靖（2016）.『鹿児島歴史の旅―島津藩政と「薩摩藩英国留学生」―』（平成27年度特別講演会・かごしま県民大学中央センター連携講座解説冊子）鹿児島：鹿児島城西ロータリークラブ・鹿児島国際大学
南日本新聞社編（1969）.『郷土人系（中）』鹿児島：南日本新聞社.
長沢鼎常設展示室所蔵資料（鹿児島国際大学内，約400点）
志茂田景樹（2008）.『蒼翼の獅子たち』東京：河出書房新社.
多胡吉郎（2012）.『海を越え，地に熟し　長沢鼎　ブドウ王になったラスト・サムライ』東京：現代書館.
鷲津尺魔（1933）.『長沢鼎翁伝』：鹿児島国際大学蔵
渡辺正清（2013）.『評伝　長沢鼎　カリフォルニア・ワインに生きた薩摩の士』鹿児島：南日本開発センター.